

元気です！ アルバック

(株)アルバック 制御(事)課長 落合 正義

1. アルバックとは

アルバックは、58年前（1952年）に故・松下幸之助氏も援助し、研究者集団が設立したベンチャー企業である。

アルバック(ULVAC)とは「Ultimate in Vacuum」のULとVACをあわせた造語で、「真空の極限を追求する」という意味である。

真空の技術及びその周辺技術を総合利用し、半導体や液晶パネル、現在では太陽電池向け製造装置などの事業で、常に独創的な先端技術を生み出し成長してきた。

2. 幅広い分野の発展に貢献

1990年代は半導体、その後液晶の製造装置事業に深くかかわり、今、多くの電気メーカー（韓国、台湾メーカー含む）で製造されている薄型テレビの多くは、アルバックの装置を利用してできている。

そして現在では、太陽電池、リチウム二次電池向け製造装置に事業の軸をシフトしている。

昨今の地球温暖化問題の深刻化や資源の枯渇・原油高騰の中、解決策の一つとして太陽光発電に対する期待はかつてなく高まっている。アルバックは、1978年頃より太陽電池製造装置の開発に取り組み、2007年には太陽電池一貫製造ラインを開発、2008年には「2008年日経優秀製品・サービス賞 最優秀賞 日本経済新聞賞」も受賞した。今後は昭和シェル石油株式会社と提携したCIGS太陽電池製造装置の開発をはじめ

めとして、さまざまな次世代型太陽電池の技術開発を積極的に進めることにより、太陽電池時代を牽引していく。

二次電池においては、薄膜、軽量、フレキシブルという特長から、安全性や適用性に優れた、薄膜リチウム二次電池の製造を可能とする世界初の一貫製造技術の開発をした。今後この技術を社会に提供することにより、小型電子機器、医療機器、環境配慮型商品など幅広い分野の発展に貢献していきたいと考えている。

このように、次なる製造業を牽引する技術革新は、環境・エネルギーや資源・材料の分野となると思っている。アルバックは太陽電池製造装置だけでなく、ハイブリッドカー関連では、世界最高性能の永久磁石製造装置とコンデンサー製造装置の開発に成功し、資源、材料の分野でも新しい材料やりサイクル、精製技術の開発に本格的に取り組んでいる。このように、最先端技術の影には必ずアルバックがいることをぜひ知って頂けると幸いである。

3. 「選択と集中」をしない

アルバックがこれまで先端技術の世界に継続的に身を置けた理由に「選択と集中をしない」という思想がある。常に新しい分野を開拓し、独創的な先端技術を生み出し続けなければ生き残れないという考えから、多くの企業が「選択と集中」という経営手法を取り入れる中、アルバックは「選択と集中をしない」を掲げ、技術

者の頭の中にある自由な発想を大切にできる環境づくりに努めている。例えば、年間約400件の新規研究テーマがあるが、これらに対してはノーと言わず、できる限り投資することで、新しい独創的な技術を世に早く出し、今後も市場をリードしていきたいと思っている。

4. 自由闊達な組織

このように、多くの新規研究テーマに取り組める背景には、「自由闊達でフラットな組織」がアルバックの社風になっているからで、これは創業以来58年かけて築かれた社風で、全世界で約60のグループ会社を擁する企業集団として成長した現在でも、従業員に綿々と受け継がれている。

5. 自主性を重んじ尊重

アルバックは、Great Place to Work Institute Japan (GPTWJ) がおこなった調査で「働きがいのある会社」に2年続けてランクインした。これは自由闊達でフラットな組織が、自主性を重んじ、働き方の多様性を尊重しているがゆえに従業員が感じた証であると考えている。

この調査で従業員が特に高い割合で回答した項目は以下の通りである。

「従業員は責任のある仕事を任されている」

「従業員を解雇するのは最後の手段とされている」

「人種に関係なく正當に扱われている」

6. 人事方針

アルバックの人事方針は欧米型の成果主義ではなく、日本的雇用慣行、つまり年功制や終身雇用などを基盤にしている。最先端技術を扱っているアルバックでは成功するよりも失敗するほうがはるかに多くなる。企業として回避すべきことは、失敗を恐れるあまりチャレンジ精神を失ってしまうことである。一度や二度失敗をしても給料は減らさない、雇用も守るといった前提があって初めて大きな仕事にもチャレンジできると考えているからである。

7. 最後に

このような社風の中で、独創的な先端技術をもって科学技術と工業に貢献する。それこそが、アルバックグループが社会に果たすべき最大の使命であると考えている。

